

(予 告)

- ：京都琵琶協会十二月例会 十二月三日(日) 昼一時本部平井春嶺会長宅。
- ：晴風会新春演奏会 一月二十一日(日) 昼東京杉並区高円寺会館。
- ：新春名流演奏会 一月二十六日(日) 正午東京銀座ガスホール、主催日本琵琶楽協会。
- ：錦心流一水会京都支部例会 十二月十日(日) 昼一時東山仁王門本妙寺。

州詩！阿井雄心▼俊寛(1)市川鶴峰▼(以下  
来賓)大楠公一浜松柿沢篁峰▼桜井野一京都  
市中鵬水▼鉢の木一横須賀石井桑水▼那須与  
市一京都矢吹旭美津▼石童丸一岡村實水▼  
坂崎出羽守一岡梅原旭濤▼茨木一横濱中谷巖  
水▼安宅の関一東京若宮旭登▼曲垣平九郎一  
広島板谷旭邑▼名月逢坂山一東京鈴木流泉▼  
海陽江(1)一軽部岳瑞▼(以下相談役)巴一東  
京望月晴江▼大塔宮一浜松小野鶴彦▼重衡一  
静岡小川野水▼錦の御旗一岡尾鶴城▼湯陽  
江(下)一会主赤心流鶴翁。以上で全演奏を終り  
別室で乾盃、閉会となった。当日は琵琶演奏  
会にふさわしい秋晴れて満員の聴衆は一曲ご  
とに拍手で堂をゆるがし各流派琵琶や吟詠の  
良さを満喫したようであった。

錦心流一水会全国大会

十一月四日(出)午前九時半東京銀座ガスホ  
ル、主催同会本部(会長船谷六水氏)。本部  
を初め全国三十九支部の選良が全四十六曲の  
単奏又は合奏で覇を競い錦心流の特長を遺憾  
なく發揮して多数の聴客を満足せしめ午後八  
時半終演。翌五日は朝十時から新宿の芙蓉会  
館に於て総会に引続き懇親会で全国琵琶友間の  
旧交を温ためて二時半頃散会。斯くて年一回  
の錦心祭全国大会はめでたく終了した。(出  
演者と曲目は省略)。

錦心流琵琶演奏会

十一月五日(日)正午名古屋中小企業福祉会館  
六階ホール、主催一水会名古屋支部(支部長  
奥村慧水氏)、協賛豊橋静岡岡支部。七卿落  
一糸井▼紅葉狩一赤坂▼河内の宿一井村▼月  
下の陣一成瀬▼城山一伊藤嘉水▼別れの国歌  
一岩間寛水▼菅公一太西弦水▼本能寺一吉見  
輝水▼湖水乗切一海野京水▼五条橋一小林残

筑前琵琶演奏大会

十一月十五日(日)正午東京日本橋第一証券ホ  
ール、主催東京旭会。壺坂寺一吉田旭明。絃  
安倍旭静▼若き敦盛一福田旭盛▼お蝶夫人一  
原田旭運。絃原島旭粧▼北の庄一松元旭川▼  
秋風故郷山一齊藤旭邑▼巡礼お鶴一足田旭絃  
▼大森彦七一渡辺旭寂▼二〇三高地一若宮旭  
登一塚原ト伝一津田旭紅▼大徳寺一野田旭条  
▼伊豆の御難一原島旭粧▼唐人お吉一藤巻旭  
鴻▼網館一旭明、旭讓、旭絃。絃旭静、旭邑。

京都琵琶協会の観楓会

十一月十二日(日)通  
天閣、東福寺等の洛南方面。(次号詳報)。  
十一月十八  
日(出)夕東京上野本牧亭。(次号詳報)。  
晴風会霜月例会。十一月二十三日(日)夕東京  
三ツ和会演奏会。十一月二十六日(日)昼京都  
東山安井金比羅会館。(次号詳報)。

ラヂオ琵琶放送

十一月九日(日)午後三時十分NHK・F.M.  
城山一山口速水▼景清一水藤五郎両氏。

転居

佐藤晃絃氏 松山市立花三丁目五・六  
に転居。

あと一ヶ月で早くも今年が終ろう  
として嬉しいやら恥づかしいやら、人  
間を長くやっていける身には感無量で  
ある。余談ながら大阪府ひらかたパークで毎  
年開かれる大小色とりどり数千株の奇麗な菊  
人形展が今秋は「太閤秀吉」で編集子は先日  
寸暇を割いて覗いてみた。NHKの「黄金の  
日日」にちなんだ二十六場面が秀吉の幼少時  
代から晩年までで「本能寺の変」その他琵琶  
歌關係のものが動的に展開されていた。また  
関ヶ原合戦絵巻は本身辻旭城先生執筆の一文  
と思ひ合わせて特に印象に残った。本号は内  
容幅狭で二、三の貴重な記事を次号廻しとし  
た、不悪。新年号年賀交礼掲載のお申し込み  
何卒よろしく。ではどうぞよいお年をお迎え  
下さい。

昭和五十三年十二月一日発行(非売品)  
編集者 植村真水  
発行所 高槻市津之江北町一ノ二二三  
電話〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二九四号 京絃社

琵琶 (三)

一忘れられんとする音の世界一

村山道宣



私は地神盲僧を訪ね、春四月、博多から敵原へ  
で対馬へと渡った。朝鮮半島を約五十キロメ  
ートルの北方海上に望む対馬への琵琶探訪の  
旅は、私に大きな期待を懐かせるものであつ  
た。ここで、その折りの話を当時の日誌から  
紹介してみよう。

対馬の盲僧(一)

博多から敵原へ  
船は、老岐の島の郷之浦港を経て、数時間  
の航海の後、目指す対馬、敵原港に着いた。  
船が最終便だった故か、既にあたりは暗く波  
止場附近は少しばかり寂しい風情である。潮  
風の匂いと波止場の前方に見える街の火は、  
海のもつ厳しさと、疲れた船人を待つ、ちっ  
ぽりな盛り場の素朴なぬくもりを微かに感じ  
させる。もう夜の八時過ぎた時分であるうか、  
土産物の店も、そろそろ閉店の時刻だろう。  
戸を閉め始めている店も何軒か見られる。  
傍に柳の木の植えてある川に沿って続く街

並みは、いかにも貧しい島の港町といつた哀  
感を、ほのかに漂わせる。道路脇の「対州そ  
ば」という古い木看板の掲げてある店に入る。  
何となく昔の街道筋の茶屋を想い起こさせる  
ような趣の有る店である。私は、この店の名  
物である「対州そば」を所望した。昨年、対  
馬を訪ねた折りの事が懐しく想い出される。  
おばあちゃんは元気で居るだろうか。昨年、  
訪問した折りは、驚く程大きな声で、多くの  
経文や語り物を私に語って聞かせてくれたも  
のが……。

多田のおばあちゃん

「おばあちゃん」と云うのは、敵原に住む  
地神盲僧、多田聖代さんのことである。御主  
人の「しよげん」さんが昭和二十九年に五  
十五才で亡くなられてから現在まで、ずっと  
おばあちゃんがその法流を護り伝えて来た。  
(しよげんさんは、明治二十二年、対馬峰  
村に生まれ、十才の年、玄清法流地神盲僧、

藤島よりじゅん氏の弟子になり、十年間、敵  
原町宮谷の顕明院で修業した後、同町の丸山  
に家を構え、地神盲僧として生活していた。  
おばあちゃんは明治四十四年生まれ、六十  
八才、下県郡久根村の出身である。おばあ  
ちゃんは、幼少時より、目は全く見えなかった。  
七才の時、天理教に入信したが、目が不自由  
なため天理教の踊りは上手に出来なかった。  
それから一年程して、御大師様の熱心を信者  
で、炭焼きをしていた渡辺乙五郎と云う人に  
導かれ、御大師様を信仰するようになった。  
乙五郎さんは、般若心経、一心頂礼、十句観  
音経、十三仏の真言など、お経もいくつか教  
えてくれた。そして、十四才の年、宮崎市大  
淀町にある今福寺という、真言宗のお寺に修  
行に出た。一年近く和讃を習うなどして、今  
福寺で暮した後、熊本県八代市にも一ヶ月ほ  
ど、御詠歌を習うために逗留し、対馬へと帰  
って来た。

それから数年後、多田しよげんさん(法  
名日芳)のもとに弟子入りするようになった。  
そうこうしているうちにしよげんさんは、お  
ばあちゃんのことを大層気に入るようになった。  
てしまふ二人は結婚することになった。  
ちよつと余談になるが、その折りのしよ  
げんさんの口説き方というのが全く驚いてい  
た。「おまえは、わしの嫁にならんか?」  
しよげんさんが云うなら、わしがおまえに数年  
来教えて来たお経や秘法を、全部返して寄こ  
せ!それが出来ないのならわしの嫁になれ!

しょうげんさんはこんな意味のことをおぼやちやんに云い、結婚を迫ったそうである。その時おぼやちやんは、よくよく考えてみた。そのころが、いくら考えてみても、一度覚えてしまったものは、狂人になるか死人にでもならなければ、到底忘れることは出来ない。「狂人や死人になるくらいなら、いつそのことこの人の嫁さんになってしまえ」というようなことで、仕方なく承諾したそうである。しょうげんさんの口説き方というのでも変っているが、おぼやちやんの決め方もまた面白い。世の中にはこんな風変わりな面白い話もあるものかと、つくづく感じ入ったものであった。

さて、夜も大分遅くなってしまったが、民宿に行く前にとりあえず、おぼやちやんに挨拶だけでもしておこう。そば屋を出て数軒の小さな飲食店が寄り添うようにして建っている小路を抜けると、おぼやちやんの住む庚申堂の灯りが見えた。おぼやちやんは元気でいるようだ。昨年来た折りは今にも崩れ落ちそうであった御堂に上る石段は、コンクリートできれいに改修されていた。御堂の入口であり、また同時におぼやちやんの居間の入口でもある、灯りの漏れてくる障子の戸の前で、私は声をかけた。「おぼやちやん元気でですか。」「よく来られました。折禱で鍛えられた、あの良く通る太い声が返って来た。おぼやちやんは元気があった。目の不自由なおぼやちやんの世話をしている

孫の光儀君もいた。二人とも私の再度の訪問を大層喜んでくれた。私は翌日また出直すことにして御堂を出た。私は対馬の満天の星々を見上げながら、何やら楽しく民宿へと向った。(この項未完)

戦国時代の女性(九)

ばくすい

清盛の妻・時子と頼朝の妻・政子(4)

都の朝廷と深い関わりがあった平家の思いの外早い滅亡は、頼朝に都入りと警戒させた。彼は飽くまでも鎌倉という東国にいて、自分の名代として義経を都入りさせ、怪物と呼ばれた老獪な策士、後白河法皇と接しさせている。木曾義仲も同じことである。法皇と頼朝との双方、精根を傾けての虚々実々の策略は、つまるところ頼朝の勝利であった。都に上って位階官等に釣られて貴族の仲間入りをするのは、法皇の思うつぼにはまることだ、と彼は知っていた。これは土豪の娘としての政子の信念でもあったろう。バックする北条時政の信念でもあった。自分自身は安全地帯にいて専ら実力を養い、弟たちを犠牲にして成果だけを握った頼朝は、

一、九二二年(建久三)ついに待ち望んだ法皇の逝去を迎えて、征夷大将軍となり本望を達した。政子もまた遂に男に賭けた夢を実現することが出来た。このとき彼女は夫より十才若い三十六才の女盛りであった。頼朝夫妻が娘の太姫を後鳥羽上皇の後宮に入れては、という九条兼実の提案に乗り気になつて、親娘三人が上洛することになったのは、矢張り政子や頼朝にさえも、外戚の魅力というものはまた抗し難いものであった。木曾義仲の長男義高が、太姫の許嫁となつて鎌倉にいたとき、幼いなりに太姫は義高を慕っていた。義仲は義経とともに、いわば頼朝のための地ならしに働いて殺されるが、頼朝はその息子義高を情け容赦なく殺した。そのことは、幼い太姫に非常な衝撃となり、以来太姫は鬱病になってしまった。政子はこの長女のためにいつも心を痛め、その仕合せな結婚を心がけていた。結婚によってこの病気を直してやるより外に方法がないと思つたのである。一条高能との縁談もあったが、太姫の烈しい反対で整わなかった。

後鳥羽上皇の後宮へ入れる話も勿論、裏に政略がからんでいたが、政子はこの大手術が或いは娘の深く傷ついた心を立ち直らせるきっかけになるかも知れぬと希みをかけた。一一九五年(建久六)、頼朝夫妻は太姫を伴って京都に入った。もと池御殿と呼ばれた六波羅の平頼盛の豪華な邸を、頼朝は専用の都での邸として使っている。奈良、京都を見

物させ、宮廷へ参内し、丹後の局を邸へ招いて贈り物をしていく。丹後局は女ながら九条兼実に敵対する、時の宮廷第一の実力者である。このように夫妻の努力も、肝心の太姫がその年十一月に亡くなったことで総て水の泡となった。

一一九九年(正治一)、頼朝は落馬して急逝した。一代の英雄として余りにもふさわしくない惨めな最期は、冷酷な弟たちに対する生前の彼の仕打ちとからめて、いろいろの噂を生んだ。齢五十三才。政子は四十三才で厄になった。しかしこの時から彼女は実際に政治の場へ乗り出してゆかざるを得ないことになった。(此項未完)



我が道を行く

六十五年(六四)

西郷天風

それは丁度、昭和十三年の四月も終りの頃で、学校では、学期初めのまだ落ちつかぬ折りではあったが、総督府学務部長推薦のことでもあり、薩摩琵琶の演奏は学期初めに相応らしい催しもあると云うので、喜んで受入れ、殊に「台湾入」に至っては、前以て歌詩の内容解説を以て、北白川宮殿下の御事跡をたたえ奉るにべき機会を得たと喜ぶ、公学校教職員たちでもあった。

ところで、この台湾の南端に近い屏東市に製糖工場や高等女学校があると聞き、製糖工場の方は少々早いようけれど、高等女学校を目標に出かけて見れば、見渡すかぎり、遠延たる大空と一線を画して、其間に何物も置かず、只一色の広大なバナナ畑やパイナップル畑の熱気を押し分けて走る二等車内の涼風に酔い乍ら、目的の屏東に着いたのは屋少し前だったろう。

町並を眺めながら、見るからにそれと判る校舎に案内を乞えば、初めての対面ながら、校長の態度はさながら旧友の如く、はるばる東京からの珍客とばかり、大いに喜び早速全生徒を講堂に集めて、形の如く、学務部長からの紹介を告げて挨拶に替え、直ちに演奏にはいった。曲は校長の望みにより、北白川宮の「台湾入」に始まって「錦の御旗」、次いで「小督の局」の順だったが、何分にも亜熱帯の台湾も、南端の五月とあっては内地の真夏に等しく、しかも講堂内で数百人を前にしての熱演は、中々骨身に堪ええなかった。

滝をす汗は、琵琶の重みでくぼむ袴に一掬いの水が溜る有様で、一曲が終る毎に呑む砂糖水は、その汗を倍加する様なものだった。そうした中では、ただ演奏にミスのないよう注意するだけが私の常だったが、折りよく無事に終了。校長はじめ教職員も満面に笑みをたたえ、その秋頃再度の訪問を約して、塩水港製糖へと軽便鉄道の客となれば、その辺り一面カムチャイの苗(それは成長した糖キ

ビの一節つつ切り取つたもの)を植込んだばかりの実に広大な畑で、前方に見ゆる数十戸まとまった部落がその工場だった。さてその当時、我々の目標とする会社は、台湾製糖をはじめとして、森永、明治、高砂、それにこの塩水港等の五社で、各会社にはそれぞれ数十戸の部落内に製糖所を備えた畑二、三ヶ所を有って居る。それに公学校を廻れば三、四ヶ月の良い職場であった。

一方この事業は、我国にとつて数少ない産業であるところから参観の来賓絶えず、勢い都会をはなれた山間僻地に不似合いの、高級旅館なみの設備が必要なのは当然であった。しかもそれ等は操業中の多忙な時の事で、我々芸能家は休業時期に招かれて行き、腕自慢の板前たちに歓待されるのも一徳とばかり二、三年の間上海から根気よく通うことになった私だった。

幸い台湾には肉身の従弟が高雄に待つて居り、二年目の秋には彼関係の新聞社台中支局の希望で、台中市周辺数ヶ所を琵琶演奏で廻り、最後に鈴木支局長の親戚へ立寄った。其処の娘の結婚披露の日で二十数人が集って居り、琵琶を聞くのは久しぶりだと喜び、「九連城」や「旅順開城」それに婦人向きのものとして「薄陽江」をのぞむ程の人達で、中々賑やかだった。そこで私は其の頃巷に流行の「軍歌露営の歌」をそのまま琵琶歌として演奏すれば、すすり泣く三人程の婦人が居たのは印象的だった。

こゝで席は茶談に改まり、此家の主人が酔いざめの口調で曰く、

私は此処の女学校の音楽教師として、毎日この歌、つまり露宮の歌を生徒達と唄っているのですが、只今琵琶で聞く軍歌露宮の歌が、これ程深刻なものとは思われなかった。ピアノによるこの歌詞の感情表現は、到底琵琶に及びません。これ程の哀傷を含んだ歌詞とは、今の今まで思ってもみませんでした。明日からピアノに合せて唄うのが馬鹿々々しい気がしてなりません」と。

私はこの音楽教師の言葉によって、語り物芸術といわれる琵琶に、詩文体の歌を取入れてみるもよしと決意し、軍歌「愛馬進軍歌」「愛国行進曲」の二首をそのまゝ琵琶歌として作譜すれば、それぞれの感情も表現され、中々捨てがたいものとなった。

その夏、上海に戻るに際し、送別の宴席で既に覚えた露宮の歌を、得意顔に合唱する師友に、この二曲を披露してその所感を乞えば、これこそ琵琶の為に出来た三曲よ、と大いに喜ばれ、やがて武漢攻略後上海に戻れば、大東放送局では、この三曲を一括して海外向放送すること、前後三回にも及んだ。

上海にはもう一局小規模の放送局があり、露宮の歌の放送はそこが初めだったが、水越声操女士は偶然それをキャッチし、何とか譜を知り度く、九州の絃友にまで問合せたが誰一人聞いた人なく、残念ながら歌う機会を失ってしまったと、述懐を残して此世を去った。



蟋蟀の声に哀愁そそる

### 関ヶ原古戦場

辻 旭 城

場所 岐阜県不破郡関ヶ原町  
交通 東海道本線関ヶ原駅下車  
駅から東へ二・五キロ、徒歩約三十分。

このあたり慶長五年（一六〇〇）九月十五日、西軍の石田三成勢と、東軍総大将徳川家康勢が戦った世に伝えられる「天下分け目の関ヶ原」古戦場の跡である。

地形は、豊峰伊吹山の南麓にある袂溢る地で、昔は交通と軍事上の要地として、古くから京都防衛のために「不破の関」が置かれてあった。この関は、伊勢の鈴鹿、越前の愛宕と共に天下三関の一つとして、その取締りは敵重を極めた。従って昔も今も変りなく、新幹線、名神高速道路が難工事を重ねた末に貫通している。

関ヶ原周辺一帯は丘陵の起伏する原野で、各地に激戦の跡が残されている。その跡を京絃と愛読の皆様方と共に偲んでみよう。

慶長五年九月十五日の夜は明けだが、前夜の深い濃霧のため全く見透しが利かない。午前八時頃になって幽かに霧が晴れかけて来

たので、井伊直政、松平忠信らの東軍中堅勢が行動を起こし、西軍島津国男の陣に向って攻撃を開始しようとした。

これを察知した福島正則らの将兵は、後れてならじと南側面から宇喜田秀家の陣に向って猛撃を開始したので、これに戦機を得た東軍の諸藩は、蜂の巣をつついた如く一斉に飛び出し、笹尾山麓に布陣の石田三成軍や、池寺附近で作戦を練っていた小西行長の陣地向って砲火をあげれば、これに力を得て藤堂高虎、京極高知の将兵も福島軍の背後から西に出て、大谷の前隊平塚為広勢と交戦し、西軍は頻りに喊声を挙げた。

家康は桃配山にあつたが、戦況を詳に知ることが出来なため、午前十時頃関ヶ原の東に旗を進め、更に進んで村の中央陣場野に出て全軍を指揮したが、正午頃には東軍の形勢は不利となり、士気は次第に衰るえ始めた。

これより先、松尾山上の小早川秀秋、同山麓の脇坂安治等は、かねてから反応の約があり、又前日には機を見て反心せしめるよう、家康が股肱の臣奥平貞治を松尾山に派遣しておいたが、依然として傍観して居て、家康が頻りに使者を出して促したけれども、更に応じない。

正午を過ぎて、最後の決心を促すため銃手に一斉射撃を命じたので、秀秋も遂に意を決し、下山して大谷吉継の陣を強く突いた。大谷はかねてこの事ありと松尾山に備え置いて三度まで山腹に退けたが、正面からは藤堂

京極らが猛撃して来るし、南面からは新たに脇坂、赤座、小川、栃木等が反旗を翻して迫り、更に背後を突かれたため、大谷吉継も三面攻撃を受けて第一番に破れ、続いて東軍は宇喜多、小西に迫ったため両軍共破れて揖斐郡春日村方面に退いた。その結果西軍は僅かに石田と島津の二隊のみとなりよく戦ったが、遂に江州方面に敗走、最後に残った島津は敵の重圍に陥ったが、前面六百米の家康の本陣めがけて、二百有余の残兵を率いて一直線に突進し、この前面を過ぎて養老郡牧田から多良町を抜けて本国に帰った。

小池から牧田までは約三キロであるが、この間東軍の追撃は猛烈で、島津軍の苦戦は名状すべからざるものがあったという。因みに豊久は、重傷を負って多良村で自刃し、また家老の盛教は、牧田村での激戦で討死した。



心にしみる繊細さ

### 三分インタビュ

薩摩琵琶の演奏と制作に情熱を注ぐ鈴木誠治（70）さん。（越谷市大成町）。  
「八日からの越谷市民文化祭で、今日もまた薩摩琵琶の弾き語りを聞かせて下さるそ

で。「ちようど十年になります。地元の人にもっと琵琶の魅力を知って貰いたくて毎年出ています。」

「薩摩琵琶とは……  
「室町末期、薩摩の国で琵琶の伴奏にのせ武勇伝や忠臣物語が広められたことからその呼び名がついたようです。琵琶は奈良時代、中国から伝わったとされています。」

「私の父が、明治末期に薩摩琵琶の宗家と親しかったことから、十五才で習い始めました。以来五十五年。毎日二時間の練習は欠かせません。おかげでほら、右手の小指にできたタコが治らなくて……。」

「今の若者にはちよつと理解し難い音楽のようですが、その魅力というところ？」

「西洋楽器と違って使いの強弱や、糸のビブラートの効かせ方ひとつで、物語の情景を心にしみ入るように繊細に表現できることです。自分で弾きながら酔いしれることもしばしばです。」

「演奏だけでなく、数少ない琵琶の制作者としても知られていますか……。」

「琵琶の素材には伊豆七島、御蔵島のクワ材を、裏面はカンナヤクスの木を使っていますが、最近では木材の入手がむづかしく苦労しています。」

「最後に日本琵琶振興会長としての抱負を。」

「若者にもわかる新しい琵琶曲を創作することです。奥の細道、水戸黄門、高野聖、旅の芭蕉といった新曲を作りましたがなかなか好評で、『東洋の響き』に多くの人を陶醉させたのですね。」（写真は省略）

（十月三日読売新聞から転載）

### 新年特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下さるべく、別紙申込用紙に料金を添え十二月十日迄に御申込み願います。

### 京都琵琶協会の創立三十周年記念演奏大会

十月二十九日(日)正午京都商工会議所ホール。

前々日来の雨も今日は午前中に止んで昼からは時々薄陽が射す好天となったが、気温が急に下がり肌寒ささえ感じられる中秋に変わった。願れば昭和三年に呱呱の声を挙げた本協会の前身「京都錦声会」のあとを受けて戦後の落ちつきを取戻しかけた昭和二十四年以来連綿と伝統を守り続けた京都琵琶協会は本年を

以て三十周年を迎えるので、春以来役員を中心に全会員挙って万遺漏なく計画をねり漸く本日の幕明けとなったもので、此の大ホールも満員に近い盛況を呈した。

また創立以来の継続会員伊吹正陽、梅原旭濤、水内煨水、植村真水並びに去る八月二十日借道古谷寛水の五氏に対し平井会長から功勞者としての表彰感謝状と立派な記念品が贈られた外、創立から現在に至る三十年間の協会沿革及び年別記録(二十四頁)の小冊子が会員や関係者に渡されたあと正午開場、受付で来聴全員に紅白の饅頭一包をプログラムに添えて贈り、舞台には金屏風を背景に右側には会旗と鑿に日本芸能顕彰会から贈与された大金盃を、左側には美事な生花の盛花を飾り、マイクを備えた演奏壇上で薩筑各派会員を初め静岡、名古屋、広島、の来賓三師の熱演が左の通り順次展開されて万雷の拍手裡に五時、十七曲の全演奏を終った。このあと記念撮影に続き地下のレストランに於てゲスト三師や態々来場声援された東京前田秋声、大阪山崎旭幸両師を囲んで祝盃を挙げて目出度閉会した。(来賓出場予定の大津伊藤旭陽女師が急用のため欠演されたのは残念であった。)

伏見稲荷大社で琵琶演奏  
十月十一日(水)一時、大阪琵琶同好会演奏。全国各地で生業に励む同神社講員の集まりが十、十一の両日行われ大阪琵琶同好会が招待を受け菅公、米原、菊水の旗、島津、新撰組、辻旭城、秋風故郷の山、石橋旭嶺、戦艦大和、田中敷水、安宅の関、中島旭穂。以上演奏参加者を喜ばせた。

京都琵琶協会十月例会

十月十五日(日)一時本部平井春嶺氏宅。出席者伊吹、馬場、矢吹、山岡、牧、水内、平井、植村。本月二十九日の大会準備のあと夕食を共にしながら十一月の例会は十二日(日)紅葉狩りをするに於てその場所等を平井会長に一任、七時散会した。

日本芸術琵琶協会十月例会

十月十五日(日)昼東京文京区の貸席京屋で開催。お江戸日本橋外弾法、錦幽、月さくら、坂入俊風、志度、青木早水、舟弁慶、内田直良、茶摘歌、西郷隆盛、原田旭鳳、異国の丘、杉山旗水、木村重成、高田栄水、乃木將軍、悲歌、若宮旭登、利休の最後、山崎錦幽。以上

上研修を終り六時散会した。  
武蔵野音楽大学に於て  
琵琶の講演と実演  
十月十九日と二十一日の両日鈴木流泉氏が同大学の主催による首題の依頼を受け先づ亜細亜の琵琶録音と説明から雅楽、平家、荒神、中国各琵琶やウーなどの由来や種類に言及し、現在の薩摩琵琶の製作を实地に披露したあと「武蔵野」「名月逢坂山」の二曲を演奏、前後二時間に亘って多数の学生に琵琶演奏に対する認識を新たにせしめ大いに啓発して効果を挙げた。

阿部秋子琵琶の花道特別公演

十月二十二日(日)正午名古屋中小企業福祉会館六階ホール、主催名古屋秋声会(会長前田秋声氏)。月下の陣、兵藤、送別、鬼頭、武蔵野、兵藤、鬼頭、菅公、山本、城山、久保田、秋鳳、太田道灌、山田秋峰、白虎隊、長谷川秋楓、屋島の誓、松浦秋翠(以下応援)乳入政岡、今泉旭玲、茨木、安江弘水、川中島、牧南水、曲垣平九郎、齊藤旭元、吹けよ神風、武田弘水、戦艦大和、土井旭浄、天野屋利兵衛、岸本港水、木村重成、丹野鏡水、禅師と正宗、伊佐地旭勢、小栗栖、谷津壮水、源平盛衰記(義経と静の別れ)、会主阿部秋子、山科の別れ、会長前田秋声(以下来賓)最遅のツカ、横須賀土橋虎水、鴨川の露、名古屋石河旭豊、八甲田山、伊東入谷

錦鳳、湖水乗切、大阪中山鳳水、常盤の前、東京桑名洲聖、若き敦盛、神戸柴田旭堂、西郷隆盛、東京谷暉水。

光椽会全国琵琶大会

十月二十二日(日)午前十時午後五時高槻市民会館大ホール、主催大和流琵琶光椽会、後援高槻市・高槻市教育委員会。秋晴れに恵まれた好天で開場前から多数の聴客が詰めかけ昼過ぎには二千五百人収容の大会場も一階椅子席はほぼ満員に近い盛況を呈し、会員吟詠三十一題、来賓吟詠十八題、会員琵琶十七題が東京から九州に亘る全国秀技者によって展開され、琵琶は寺尾旭吉、久徳旭蘭、外四女史合奏の「茶紋緑(茶道大橋宗史社中)」、矢吹旭美津、佐藤旭天、林田旭城、琴奥村旭翠、四女史合奏の「千代の寿」、押川旭葉、外三女史の歌、山崎光椽、外二人の絃による「義経絵巻」、宗家琵琶の「曾我兄弟」など美事を演奏、又、七才十才の男児の琵琶弾き語り合奏「一休さん」、六才六才七才三女児合奏「花咲翁さん」などヤンヤの喝采が堂を揺るがした。尚番外として西島高槻市長の真剣を使った居合抜きの実演は人目を引いた。その他琵琶吟詠、舞書道吟、琴合奏など十曲による「山崎先生の足跡」や最後の琵琶「茨木」(山崎、絃矢吹、林田、板谷、押川)は庄巻であった。



琵琶と詩吟詩舞の会  
十月二十九日(日)正午西宮市夙川公民館松下ホール、主催西宮市教育委員会、主催西宮琵琶吟同好会(会長三浦蓮水女史)。第十七回の催して市文化祭参加。菅公、高原柳水、大和懐古、田中珠水、木ノ宮梅水、小楠公の母、古田秋水、本能寺、村上湧水、屋島懐古、滝沢花水(以上奥松披懸)、青葉の笛、生島華水、重衡、山崎蘭水、城山、田村魁水、菊水の旗、古山瞳水、吉野山懐古、川上蓬水、楊貴妃、楊柳水、敦盛、(来賓)東京館谷六水、舟弁慶、内田欽水、小川吟水、琵琶舞母常盤、川上琵琶水、三浦蓮水、立方三、政岡、木庭旭山、勸進帳、会主三浦蓮水。外に詩吟三十一題。

筑前薩摩琵琶秋季演奏大会

十月二十九日(日)一時松山市民会館小ホール、主催愛媛琵琶連盟、後援県教育委員会外。君が代、会員、門琵琶、芦原、芦水、城山、大西、石童丸、大木、曾我夜討、黒木、伏見の吹雪、森元旭、秋風故郷の山、原田旭悠、鳥、別れの盃、齊藤旭苑、井伊大老、酒井旭調、舟弁慶、遠藤旭佳、鴨川の露、和島旭秀、赤垣源蔵、雨森旭生、長柄の秋風、村上旭隆、竜の口、佐藤晃、菊の礎、白石旭優、綱箱、谷口旭美、俊寛、栗田水、堅田落、石塚旭奏、隅田川、外久旭好、北の庄、佐竹旭都、薩摩健児、琵琶浅田、尺八高瀬、剣士四人、名月逢坂山(来賓)東京鈴木流泉。

筑前琵琶保存会第十四回演奏会

十月二十九日(日)正午福岡大博多ビル十二階ホール、主催同会(会長嶺旭蝶女史)、後援県市教育委員会外。市芸術祭参加。御祝儀君が代、旭嶺外二人、花咲翁さん、養老の滝

元寇の乱、巖流島決闘、以上四曲を六才から十三才迄の男女児が各合奏、常陸丸、西日本婦人文化サークル八人(指導旭蝶)板敷山、十三才女児二人、石童丸、旭嶺外二人、血達磨、内田旭潮、ルソンの壺、青山旭子、川中島(来賓)箱根押川旭葉、プロジェクト、シン、74、旭蝶、旭子、蛸狩、旭蝶、旭子、琴、胡弓、語り。

第十八回秋季演奏会

十月三十日(日)正午東京日本橋第一証券ホール、主催薩摩琵琶正絃会。古曲門琵琶、合奏、花の白虎隊、岩屋吟照、川中島、石田錦穂、錦の御旗、本橋山舟、忠度都落、正本溪舟、三方ヶ原合戦、三上鶴浄、吉野落、佐藤湘春、同、下、浜野錦宝、彰義隊、柿沢箕峰、武蔵野、清川風舟、城山、古家絃風、水兵の母、柏木篁道、弾法、辻靖剛、小松の操、伊集院牙城、同、大塚岳峻、菅公、八束一峰、常陸丸、仲川秀邦、鉢の木、遠藤鶴東、大塔の宮、小野鶴彦、本能寺、平井春嶺、奇縁、岡部錦蝶、桶狭間、池野谷吟岫、滝口入道、山本鶴声、戦艦大和、栗原雨竹。

赤心流琵琶演奏会

十一月三日(日)午前十時静岡市城内泉婦人会館、主催吟詠琵琶赤心流(会長赤心流鶴翁氏)。毎年春は主として吟詠会、秋は琵琶を主として催して今秋は第十一回目の開催である。舞台は花輪と大鉢植えの緑松を左右に配した中で、先づ吟詠部七十一人に各昇任免状授与式が厳そかに挙行されて三十一題の吟詠、少憩のあと琵琶演奏に移り青毛氈を敷いた一段高い演奏壇上部の「赤心流琵琶大会」の大書横書幕を背景に(門人琵琶)金剛石、松本駿堂、春日野、松本鶴鈴、蓬萊山、荻野鶴津、涼